

町と野球部支援の絆

胆振東部地震 2年

芽吹くまち

④

8月5日、札幌岡山球場。高校野球の南北海道大会1回戦、鶴川(むかわ町)は立命館慶祥(江別市)を相手にシーソーゲームを展開していた。九回裏、追加点を挙げ3点差に迫り、なお2死2塁の好機。その時、二塁走者がけん制で刺された。3年生10人の夏が終わった。2年前の胆振東部地震で野球部寮が半壊し、避難生活を体験した部員はいなくなる。

「激しい揺れでたたき起こされた。慌てて部屋を飛び出し、廊下になっていた仲間と声を掛け合った」。夏まで主将を務めた阿部裕希さん(3年)は、震度6強に襲われた未明の出来事を鮮明に覚えている。

ベッドから滑り落ちた部員。寮は玄関のガラスが割れ、食堂でも

8日後。「野球をしているような状況ではない。町のためにボランティアをしよう」。秋季大会で敗れた直後のミーティングで当時の主将が提案し、部員は一致団結した。放課後、手分けしてカボチャやイチゴなど



国内初の寮仕様の仮設住宅で生活する鶴川高の元野球部員の3年生。1年生の時に被災し、ボランティア活動に励んだ「むかわ町で4日、目塚太一」撮影

鶴川高「寄り添う心」寮で受け継ぐ

の農家を歩いて回った。壊れたビニールハウスを撤去したり、出荷できなくなった野菜の運搬を手伝ったりした。1日2〜3時間、約1カ月間続けた。石田毅部長(5)は当時を振り返る。「日ごろから差し入れをいただいたりして、部員は町内の方々からの支援で野球ができていたと分かってた。ボランティアは当たり前のように始まった」



状況が落ち着き、部員は小学校跡地を利用した台宿施設で寝泊まりした。風呂は約4㎡離れた道の駅までバスで通った。2019年1月、町中心部に建てられた仮設寮に移った。全国初となる寮仕様の仮設住宅。野球部伝統の言葉「三気・一気」。大きな声であいさつする「三気」、全力疾走の「本気」、一気呵成の「一気」。竹中喜之町長はこう激励した。「ボランティアに感謝している。三気精神でがんばってほしい」



12月の完成に向け、建設が進む鶴川高野球部の新たな寮。むかわ町で8月20日、目塚太一撮影。2年前の地震で周辺が陥没するなど半壊の被害を受けた鶴川高野球部寮。鬼海将一監督提供

震災から2年。仮設寮では、引退した3年生を含む部員計39人が共同生活を送る。解体された寮の跡地では、新たな寮の建設が12月の完成に向け急ピッチで進む。総工費約3億円のうち、道の補助を除けば約2億4000万円は町が負担した。しかし、新たな町のシンボルとなる寮の再建に町は負担をいとわない。町教委の飛岡雅幸主査(45)は「町に唯一の高校を守るため、寮の新築は最重要課題」と言い切る。

室内練習場が隣接する新たな寮。春のセンバツに21世紀枠で02年初出場し、04年、09年も出場した強豪復活の拠点となる。同時に「被災世代」の部員がいなくなる中、地域と支え合う伝統がここで引き継がれていく。阿部さんは言った。「2年たった今も避難生活を続けている人がいて、町の復興はまだまだ。後輩たちにも、寄り添い続けてほしい」【平山公崇】